

名古屋電子図書館国際会議 (IADLC) 2005 に参加して

東京大学情報基盤センター図書館電子化部門  
小山憲司

2005年8月25日。折りしも、台風12号が東海地方に近づきつつある中、新幹線が止まらないうちと思い、東京を早々に出発した私は、8時過ぎには名古屋駅に到着した。ところが、名古屋では雨どころか、風さえもほとんど吹いておらず、少し拍子抜けしたことを記憶している。このような中、2日間の長きにわたる電子図書館国際会議が始まった。

さて、今回の国際会議は、時間(歴史)という縦軸と空間(地域)という横軸の2つの軸を柱として、さまざまな視点から電子図書館を考えさせられるいい機会となった。中でも興味深かったのは、「いかに効率よく、かつ効果的にWeb上の情報を収集、整理し、それをユーザに提供するか」ということであった。これについて、いくつかの発表を引きながら、触れてみたい。

まず、初日のキーノートスピーチとして、杉本氏が「Challenges in Digital Libraries: Key Issues Learned from Metadata-Centric Projects at Tsukuba」と題して講演された。ここで議論の対象となったのは、Web上の情報資源を記述するための枠組みであるメタデータをキーコンセプトに据え、いかにその情報にアクセスしやすいように付加価値をつけていくか、そのための仕組みはどのようにすべきか、そしてそれを実現するためには何が問題であるか、といったことであった。その中で、主題をどのように表現するか、ということに焦点が当てられていたのが私には非常に印象的であった。ここでいう主題表現(subject vocabulary)の例として、NDCやUDCといった図書館界ではおなじみの分類法から「デジタル岡山大百科」で用いられている岡山県が作成した独自分類「夢づくり分類」や子ども向けの分類まで、さまざまな分類法が紹介された。図書館がこれまでも得意としていたインデクシングや目録法の思想や技術を、Web上の情報を整理・提供するために積極的に還元していくことの必要性を強く感じさせられたのは、私だけではなかったのではないかと思う。

このことは、次のセッション1で発表された、LIM氏の「Web mining: the Ontology Approach」にも通じる話である。LIM氏は、Webサイトの構造と個々のWebページとの関連性に着目し、そこにオントロジーによる解釈を用いることで、Web miningをより効果的に行う手法を提案している。今回の実験は、大学というある意味均一化されたコミュニティを対象にしているため、Webサイトの構造が近似していること、また発信される情報そのものの特徴が類似していることから、満足な結果が得られたようである。これを一般のWebサイトに適用していったときに、どのような枠組みが必要になるのかということに

は大変関心があるところである。

これと同様の発表として、鈴木氏の「Hierarchical Organization of Web Documents based on Hypertext Classification」があった。鈴木氏も LIM 氏同様、大学内の Web サイトを実験フィールドとして採用、Web サイトの階層関係に注目して、その構造を解析することにより、自動的にディレクトリを再構築しようとするものである。現在、学内で生産された情報をいかに早く、しかも効率的に発信していくかというのは、どの大学でも喫緊の課題であろう。私の所属する東京大学情報基盤センターでも、学術情報ポータル「Academic Navi U-Tokyo」(通称アカナビ)によってそれを実現しようとサービスを開始したところである。本システムでは、収集した情報を言語処理技術を用いることにより、用意されたカテゴリに自動分類するという方法をとっているが、この精度をいかに向上させていくかが大きな課題となっている。今回の鈴木氏の発表から、さまざまな手法が模索されていることを知り、大変興味深く拝聴した。

そして、もう一つ触れておきたい発表が Kawtrakul 氏の「A Unified Framework for Automatic Metadata Extraction from Electronic Document」である。Kawtrakul 氏の発表は、電子文書からいかに自動的にメタデータを生成するかというところに焦点があたっているが、ここで特徴的なのは、タイ語の文書を対象としていることである。文字だけでなく、音声や画像、動画など、さまざまな情報が一元的に Web 上で扱われていることは言わずもがなのことであるが、いわゆる学術情報を伝達する手段としては、文字による表現がもっともポピュラーであろう。このことは、世界中の言語をどのように扱うかという点にまで拡大する、大きな課題となる。処理対象となる言語が異なり、その文法体系が異なれば、それを処理するためのアルゴリズムは当然異なることが予想されるが、それでもなお、情報技術という汎用的な基盤の上であれば、さまざまな研究成果が相互に利用可能なのではないかと考えさせられる発表であった。

以上のことは、今回参加させていただいた国際会議のほんの一部にすぎないが、これだけでも大変有意義な会議であったことを想像していただけるかと思う。私もここで得た知識や人脈をもとに、今後の大学図書館活動に生かしていきたい。最後に、このようなさまざまな情報をご提供いただいた発表者の方々、このような機会を企画いただいたオーガナイザーの方々、そしてこの場をご提供いただき、さまざまな場面でお世話いただいた名古屋大学附属図書館の方々に感謝申し上げたい。